



新宝島

教育

1994

ジュニア・ボランティア教育誕生

$\frac{3}{1000}$ 人に役立つ教育を



日本初のボランティア教育がスタート 1994

5月特典

向山洋一
教育資料

No. 18

2025
MAY

「ジュニア・ボランティア教育」とは、

日本のすべての子どもたちに「二年間に三時間、人に役立つ学習をしてもらおう」

という運動である。

日本の学校では、一年間に、およそ1000時間の授業や行事が行われている。だが、それらのすべてが、「自分のための学習」になっている。

向山洋一氏は、1000時間にうち、せめて「三時間」は、「人に役立つ学習」を取り入れたいと考えた。

一年間に、わずか三時間。

しかし、当時としては、それすらも大きな挑戦だった。

1994年、向山氏は、『ジュニア・ボランティア教育』誌を創刊。

さらに、この運動に賛同する全国の仲間とともに、「ジュニア・ボランティア教育」のテキストを次々と作成した。

「車いすのたたみかた・ひろげかた」

「車いすの人と話すときのフォーム」

「車いすの押し方、止め方」……。

今日、全国の学校で実施される「車いすの授業」や「手話の授業」の原型は、「ジュニア・ボランティア教育」のなかで誕生した。本冊子には、

(1) 向山洋一『ジュニア・ボランティア教育1994年4・5月号』東京教育技術研究所

(2) 向山洋一「ジュニア・ボランティア教育（構想ノート）」1993年
向山実物資料A15-01-01

(3) 向山洋一『教室ツウウェイ1994年3月号』明治図書

(4) 河田孝文、他『ジュニア・ボランティア・テキスト（手話を覚えよう）』東京教育技術研究所1994年

等が収録されている。

なお、解説は、河田孝文氏である。

「ジュニア・ボランティア教育」

講演会の音声はこちら



<https://vimeo.com/1074832339/fb8d342f16>

車いすの方が困っている場面に出会いました
その時、まず何をしますか

- | | |
|---|------------------------|
| 1 | すぐに介助する |
| 2 | 「手伝いましょうか」と声をかける |
| 3 | おせっかいになつてはいけないのでじつと見守る |



障害者の方が、街に出た時、様々な困った場面に出会います。

そこに居合わせた時、「お手伝いしましょうか」と、まず声をかけましょう。この言葉は、介助する時のエチケットとしても大切です。

また、言葉の違いはあるにせよ、世界中どこでも使われる共通語でもあります。こうした一言を多くの人と言えるようになれば、障害者の方も、もつともつと街に出やすくなります。

答 2



問題 大野本一雄（岡山県津山市立西小学校）
イラスト 多胡由夏（岡山県奥津町立奥津小学校）





↑講座の始まる前に全国各地（北海道から沖縄まで）から参加した先生方にインタビューする向山代表。午前10時から午後4時30分まで5講座すべて向山講演である。「向山先生の全てを吸収したい」という意気込みが伝わってくる会場であった。

→「ジュニア・ボランティア教育」を提唱するにいたった経過を話す向山代表。日本の全ての子どもに「1年間に3時間（180分）、人のために役立つ学習をしておこう」という運動である。これまでの日本の学校教育は年に1000時間余りの学習をするが、全て自分のための学習である。これはおかしい。「人に役立つ学習」があるのだ。このことを多くの人に知ってもらいたい、という願いから運動を始めた——力を込めて語り、多くの人に支援を訴えた。



←「ジュニア・ボランティア教育」の持つ大きな意味に、参加者はしばしメモをとる手をとめて聴き入っていた。



→講演後、すぐに『1000ジュニア・ボランティア教育』呼びかけ号を100冊購入し、広め、支援することを話す北海道の浅尾先生と福井県の高橋先生。





←定員300名の会場にいっぱいの参加者。後ろは机なし、いすだけの先生方が数十名いた。キャンセル待ちが80余名、電話問い合わせであきらめた人が百数十名、総計550名を上まわる申し込みがあった。



↑『ジュニア・ボランティア教育』誌の編集長・岡山県の甲本卓司氏(左)。昨年10月、向山代表の提案を受けて、即、授業実践した第1人者である。



↑山口県の田中聡氏。やはり向山代表の話をきき、すぐ行動した人である。正月を返上して動き、1か月の間に山口県にいち早く「ジュニア・ボランティア教育」を根づかせた人である。



↑『ジュニア・ボランティア教育』誌の号外を配る師尾喜代子氏。雪谷小6年が授業参観で行った「ジュニア・ボランティア教育」のようすをドキュメント風に書いた号外である。



↑休み時間に書籍売り場に集まった人達。「ジュニア・ボランティア教育」に関する資料があつという間になくなってしまい、急ぎょ旗の台の事務所まで取りに行くほどであった。

巻頭論文

3
1000
の思想

日本の学校は「人に役立つ教育」をしていなかった

T OSS代表
向山洋一

子どもが親に聞いた。

「お母さん、どうして勉強するの？」

母親が答えた。

「それはね。お母さんのためじゃないの。自分のために勉強するんですよ」

子どもが先生に聞いた。

「先生、何のために勉強するんですか？」

先生が答えた。

「それはね。先生のために勉強するんじゃないの。自分のために勉強するんだよ。」

今から、二十年以上前は、日本中、どこでもこのような会話がされていた。

これは、第二次世界大戦の影響である。

自分のことをすべて捨てて、自分のすべてを国のためにと教えられてきた。

「滅私奉公」である。

戦争が終わって、針は逆にふれた。

しかし、針は、ピンとふれすぎた。

「減私奉公」のかわりに、「減公奉私」の世の中になってしまった。

他人のことはどうでもいい。自分さえよければいいという社会になってしまった。

「減私奉公」から「減公奉私」の社会になってしまった。

利己主義者が急増した。

「自分さえよければいい」という考えが、若者を支配した。

これを何とかしたいと私は思った。

学校では、一年間に、およそ千時間の授業・行事をする。

そのすべてが、「減公奉私」を反映していた。

私は、1000時間のうち、せめて「三時間」は、「人に役立つ教育」を導入したいと思った。

一年間に、わずか三時間である。

これでさえ、当時は大変なことだったのだ。

「車椅子の授業」「手話の授業」などに取り組んだ。

今は、全国で実施される「車椅子の授業」も私たちが初めて開発したのである。

それ以前には、日本の学校で「車椅子の授業」は、実施されていない。

伝手を廻って、車椅子を一台借り出して教室で授業をした。

車椅子をたたむ、ひろげるから実施した。

車椅子の人と話すフォーム。

車椅子の押し方、止め方。

このような所作のことを、テキストに作り、授業をした。

一年もたたないうちに、社会福祉協議会から何台もの車椅子を借りられるようになった。

体育館での授業を工夫した。

古いマットの下に、丸太の棒を入れたガタガタ道。

段差のある道、そして、坂道。

体育館にさまざまな地形を作り、グループで工夫、練習をさせた。

次に、学校全部を使つての授業を創り出した。

校庭も、校舎内も、裏庭も使った。

更に、地域、町の中での授業も開発した。

建設省都市計画課の小沢課長をはじめ、専門家も参加して、「バリアフリー」の突っ込んだ話し合いもされた。

館野校長は、自分が車椅子に乗り、「切符」「買い物」などの授業を公開した。

私たちは、それを本誌「ジュニア・ボランティア教育」誌で報じていった。

ボランティアの授業は、心ある教師をとらえ、その実践は、全国に広がっていった。

現在、全国で実施されている「ボランティアの授業」の九割は、私たちTOS Sが開発し、広げていったものである。

ボランティアの授業を始めた頃、全国の教師の多くは、反対であった。

とりわけ、組合の先生方は、ものすごい勢いで反対をし、足をひっぱった。

「ボランティアは、自分の心でやるものである。教えられてやるものではない」と主張した。しかし、「ボランティア」について教えられなければ、「行動する」こともない。

私の教え子は、私立中学に入学して、すぐ「ボランティアクラブ」を作った。

それは、テレビで大きく報道され、感動と共感を呼んだ。

「障害を持った子は、劣等感を持つ」と反対した先生もいた。

私は、次の実話を話した。

東京の重度の子のいる学校のことです。介護の先生に車椅子を押されて、二人の子どもが廊下の角にきました。前の車椅子の子が、手を上げて、後ろの車椅子の子に言いました。

「ここは、曲がり角だから危ないよ」

どんな子だって、「人に役立つこと」をしたいのだ。

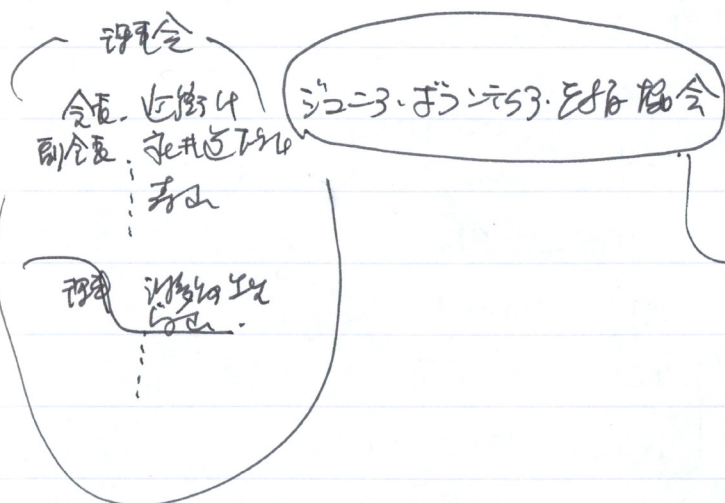
このような教育の場を作っていきたいのだ。

ボランティアの授業、教育は、大きな反対があつたにも関わらず広がっていった。

そして、今、誰でも、「ボランティアの授業」をすることは、当たり前だと思っている。

地球環境教育、エイズ教育、町づくり教育などと共に、T O S S が創ってきた社会貢献教育がここにもある。

3. ジュニア・ボランティア教育の活動としての構成



準備会 → 合同団 → 財団

① 指導者育成 (①)

- ・ 教師
- ・ 青年
- ・ 次世代
- ・ 社会福祉
- ・ 環境教育
- ・ 社会福祉 (ボランティア)
- ・ J.C. ボランティア
- ・ 企業
- ・ 社会福祉の育成 (育成)

② 人材・プログラム開発

(合同で募集。率先して活動していく。)

合同で活動 (ボランティア) のため

③ 社会・福祉活動

④ セミナー

⑤ 企業協賛

⑥ 社会福祉活動

⑦ 地方自治体

① 福祉施設

② マスコミ

③ 学校 / 社会福祉の育成

・ 社会

・ 社会福祉

2. 社会措置としてのジュニア・ボランティア教育の位置

1). 4つの層から考える

- | | | |
|---|----------------|--|
| ① | 退廃者 | ① 退廃者の復活ネットワーク化
(退廃者への支援活動) |
| ③ | 社会・企業 (大企業) | <ul style="list-style-type: none"> ・ 支援者 ・ 企業活動の具現化と人材育成 |
| ③ | 高齢者・中学生 (大企業) | → カリキュラムとしてのジュニア・ボランティア教育
(ex. 国30mrd)
② 高齢者への支援 |
| ④ | 小学生 (幼児) (中学生) | → ジュニア・ボランティア教育
(ボランティアの基礎を教える) |

2) とりわけ、「ジュニア・ボランティア教育」の普及にありし、存在意義として、「学校制度への反映」、「企業の参加」、「退廃者の人権活動・ネットワーク化」を挙げられる。

D 本邦の普及段階

A. 全国1000万人の小学生及び幼児児童。

B 過渡期段階として。

初年度	講師	I期 15名 (35×300 人 ^{200人})	テキスト・資料の講師 制度の整序
		II期 35名 (35×1000 人 ^{200人})	諸制度の確立。 資金手当ての確立。
2年度	講師 宣伝	III期 105名 (35×3000 名)	国子流旧体制の専任 法制化への広がり
		IV期 305名 (35×1500 名 ^{200人})	満年齢体制の確立
3年度	制度化	V期 1005名 (30×3000 名)	指導者体制の確立
		VI期 2005名 (30×600 名 ^{1500名})	1500名の指導者体制の確立 1500名の指導者体制の確立

E. 本邦の普及のX-1. 概観 — 日本初、ジュニア・ボランティアの運動の発展

- 1) 日本初は、1971年1000万人の全子どもが、ジュニア・ボランティアの運動のためである。71-72年8%の子どもが、ジュニア・ボランティアの運動のためである。1971-72年12-13のジュニア・ボランティアの運動のためである。
- 2) このジュニア・ボランティアの運動は、1971-72年8%の子どもが、ジュニア・ボランティアの運動のためである。
- 3) X-1-1. さすがである。そして、これは、1971-72年8%の子どもが、ジュニア・ボランティアの運動のためである。
- 4) このジュニア・ボランティアの運動は、1971-72年8%の子どもが、ジュニア・ボランティアの運動のためである。

ジュニア・ボランティア・教育の構想メモ.

1993. 11. 6 y.makaguma.

1. 小学生を中心としたジュニア・ボランティア教育の普及.

A. ジュニア・ボランティア教育とは.

ハイテク化の社会で理解し支援できる授業や環境改善の大切さと
理解し行動できる授業などを中心とした「人に役立つ学習」である.

B. ジュニア・ボランティア教育の骨格.

- 1) 一年間に三時間を一つのユニットとした学習である.
- 2) 一つのユニットごとに「テキスト」「修了証」「パスポートカード」がい
るものに授業ワーク → テキスト作成
- 3) 学習の場は、学校・児童館・社会団体・塾などどこでも
学習のために活用していい所が理想である.
- 4) 指導者は、前社会団体の指導者などである。所々に指導者
講習会(通称講習会)を設けた人である.
→ 指導者システム

C. ジュニア・ボランティア教育のステップ

- 1) 1年に1回以上の学習を目標とする
→ 講座に名前をつけれ
- 2) 修了者は、学校に連絡して、修了証が授けられる
→ 年度別の修了
- 3) 修了者名は、機関誌(ジュニア・ボランティア・年報)に発表される
→ 機関誌の発行

7. 本号. 子.

1. シニニ3. オウニニ3. エルとは.

2. シニニ3. オウニニ3. エルの屋とは.

① 屋の概略

② " 準備

③ 一時的な目的の様子

④ =

⑤ =

⑥ 子どもの作文

⑦ 絵の添削

⑧ 参加した

⑨ 反響

⑩ 今後

3. シニニ3. オウニニ3. エルへの夢

1.

2.

3.

4.

4. シニニ3. オウニニ3. エルの夢の夢

5. 運動. エル. オウニニ3. エル

1). 社会性 不在

2). 運動性 あり

3). — , 高知

4). 大場

5). 大場

6. 今までの生活の様子

7. シニニ3. オウニニ3. エル

大場

参考資料

8. とは2a. 今までの生活

9. 絵. (全員の) 絵の添削.

雑誌の発行

1. 「ジュニア・ボランティア・友誼」
2. 当面は「ボランティア・臨時」として。
3. できれば月刊？ (1冊 - 1冊 内容)

4. 月刊型. 「ボランティア」型. 1冊 450円.

{ 1年. 5400円
 半年 3000円
 1ヶ月 530

5. 編集. 編集長. 甲本. 最終編集者 (2118人) 324人!
 (とらばら. 1年4の 副編集長 藤尾
 体制に2) 編集. 松本
 大野木 and (同山). 1冊 530円.
 (編集人. 向山洋一)

6. 「才一」 2月5日出版 (2月11日 - 1月12日 - 2月12日)

↓
 事務次郎 11月20日. (甲本 才一 同)

push. 182 → 松本
 大野木

表紙. 300人の若者. 「松本」

2118人?

ジュニア・ボランティア教育 はじめての一步 向山 洋一



日本で初めての「ジュニア・ボランティア教育」の運動が誕生し、雑誌『ジュニア・ボランティア教育』誌が誕生しました。

日本のすべての子どもたちに、一年間に三時間の「人に役立つ学習」をしてもらおうという運動です。

ボランティア活動をされている方の中には「これでは不十分だ」と思われる方もおられるでしょう。

確かに、年間三時間は、少ないかもしれません。

しかし、たとえ三時間でも「人に役立つ学習」を受けた子どもは変化します。手話に関心をもち、点字を学ぼうとし、ハンディキャップの方々とかかわりをもちたいと思います。

こうした変化は、子どもにとっても、社会にとっても望ましいものです。

ボランティア社会への確かな第一歩ということが出来ます。

十分なボランティアに関する学習時間を毎週一時間、年間五〇時間としたとします。もし、これだけの時間をとる教育運動を仮定すると参加できる子どもは、ぐっとへります。全国で一人の子どもの参加があれば大成功でしょう。

すると、五〇時間×一人＝延五〇万（時間人）ということになります。



これを一年間に三時間一千万人の子どもたちに実施すると次のようになります。
三時間×一千万人＝延三千万へ時間人

何と、年間五〇時間のボランティア教育をした時の六〇倍となります。パーセントに直せば、一二〇パーセント対二パーセントです。

どちらの方が、社会に力がたくわえられるのか、どちらの方が原動力になっていくのか自明です。

年間三時間のジュニア・ボランティア教育は、日本の社会の基礎部分に「人に役立つ学習」、「人に優しい生き方」を育んでいくことになります。

といって、私たちは年間五〇時間のボランティア教育に反対しているわけではありません。そのように熱心な学習も必要だと思っています。

また「学習」だけではなく「実践」することも大切だと思っています。

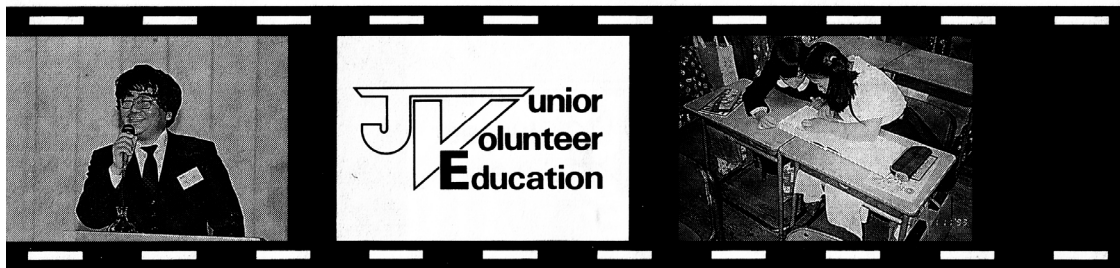
ただ、私たちは、そうした、本格的なボランティアの出発点に、年間三時間の「ジュニア・ボランティア教育」を考えているのです。

わずか三時間の学習で、子どもは変化します。

こうした学習を、日本全国で繰り広げていきたいと思っています。

私の勤務する東京都大田区雪谷小学校の六年担任三名は、一九九四年一月の授





業参観日にジュニア・ボランティア教育を実施しました。

「手話・点字・車いす補助」の授業です。参観した保護者にも、子どもたちにも、好評な授業でした。

ある子は、次のような感想を書きました。

ハンディキャップをもった人達

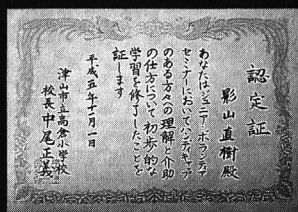
関戸 紀子

私は、今までハンディキャップをもった人は不幸な人たちだと思っていました。テレビでよく、目の見えない人や、歩けない人などのことをやっていますが、それを見るとやはり、ハンディをもっている人は毎日が不幸の連続なんだと思ってしまいます。

しかし、参観日に向山先生のおっしゃった、「ハンディキャップをもった人達は不幸ではない、不便なだけだ」という言葉は、多分一生忘れないと思います。

先生の言葉を聞いて、今ニュースの一つを思い出しました。生まれつき両うでがなく、足の長さもちがうという女の人のことです。その人はそんなハンディをもっている、歌がうまく、日本に来日して公演をして、たくさんの人達

Junior
Volunteer
Education



が応えんしてくれたそうです。私はそのニュースを思い出してこう思いました。「その女の人も不便ではあるけれど、不幸ではないんだなあ」と思いました。

私は中学を受験します。合格したら点字部、点字同好会、手話などに、絶対はいろいろと思っています。それは調布中の文化祭の点字部でやらせてもらったことからしました。今は調布中の点字部に入ることが第一の目標です。

また、東洋英和中には手話と点字の同好会があるので東洋英和中にはいったら絶対はいりたいです。（注 関戸さんは東洋英和中に入学しました）

第二の目的は将来、小児科の医者になることが夢ですが、もしなれなかったらボランティアの仕事をやって、目や口や耳などの不自由な人の手助け、老人の手助け、貧しい国にいる子供の世話などの仕事をやりたいです。

ハンディキャップをもった人へ今まで勉強したことのできるかぎりのことをして、自分もなったときに困らないようにしたいです。

「ジュニア・ボランティアの大切さは分かりました。

では、まず何をするかです。」

私は「ジュニア・ボランティア教育」を実践することと、本誌を普及すること





の二つがとりあえず大切だと思います。

いざ実践しようとする、必要なものが見えてきます。

「テキスト」が必要です。「指導書」もいります。「教具」もあった方がいいでしょう。必要な教材・教具・指導書をいそいで準備しなくてはなりません。

その情報が『ジュニア・ボランティア教育』誌に載ります。

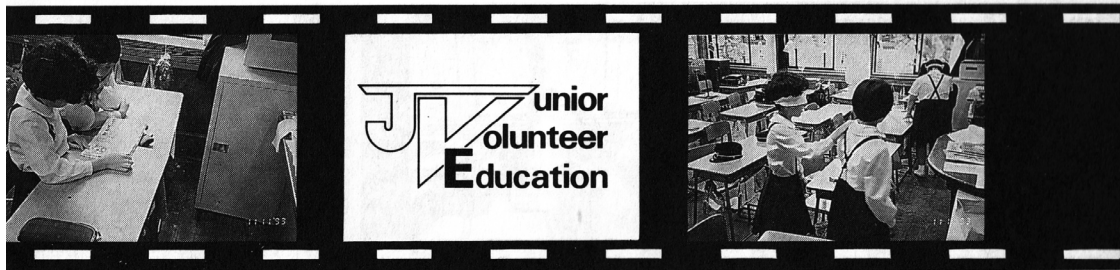
他の人が、どうやって道を切り拓いたかも載っています。

従って、実践する上でも『ジュニア・ボランティア教育』誌があることは、絶対に必要な条件であります。

この運動は、教師の研究団体が始めました。教師こそ我が教え子に「人に役立つ学習」をすることの大切さを痛感しているからです。

無理をして、雑誌も発刊しました。雑誌の発刊は、大切なことですがお金がかかります。一号出すと何やかんやで二〇〇万円ぐらいかかります。一年間で二十万ほど必要です。今は借金をして、雑誌を出していますが、それほど長くは続けられません。一年間持たせるのが限界です。

しかし、一年間のうちに、この雑誌を購入してくださる方が五千名を越えれば、続けていくことが可能です。一年間といっても、実質は秋までの半年だと思えます。その間に、普及できなければ、残念ながら撤退することになります。





JV junior
volunteer
Education



しかし、普及すれば「人に優しい社会」の未来が開けます。

この本を読んだ一人一人の力が、この本を普及して下さることが、ジュニア・ボランティア教育を支えるわけです。

各地で運動が広がりつつあります。お願いにいくと、ほとんどの方が理解し応援してくださいます。一人で何冊も購入して普及して下さる方もいます。

2・11を機会に二十冊以上呼びかけ号を購入して下さった方は次の通りです。

槇田 健(山口)	500冊	西尾文昭(福井)	100冊	雨宮 久(山梨)	100冊	長沢敬子(東京)	20冊
吉川廣二(島根)	300冊	竹川訓由(宮城)	100冊	藤原 章(島根)	50冊	木村孝康(兵庫)	20冊
藤原欣治(秋田)	100冊	高橋正和(福井)	100冊	大島英明(島根)	50冊	青坂信司(北海道)	20冊
星野祐二(福島)	100冊	川口達実(富山)	100冊	井上 茂(兵庫)	30冊	千葉幹雄(北海道)	20冊
松本勝男(島根)	100冊	近藤重男(山梨)	100冊	柏木秀樹(兵庫)	30冊	三浦哲也(北海道)	20冊
浅尾三吉(北海道)	100冊						

ありがとうございます。

すると、ポイントはこの運動を広げるために「実行する人」「行動する人」が、どれだけいるかということになります。この雑誌を一人でも多くの方に紹介して購読してもらってください。そこが、第一歩の出発点です。「ジュニア・ボランティア教育」のこれからは、『ジュニア・ボランティア教育』誌の普及から始まります。

[illegible]

「教室ツーウェイ」原稿用紙 B5判 9ボ20字×30行×3段(行間6ボ 段間3倍アキ)

特集 緊急提案 人の役に立つ学習 ジュニア・ボランティア教育の提案

年間3時間の 「人の役に立つ学習」を

本誌でふれてきた「ジュニア・ボランティア教育（学習）」は、大きな反響をよびつつある。すでに岡山では実践され、新聞・テレビでも紹介された。各地で活動が開始され始めた。この流れを大きなものにしていくため、読者諸氏のお力添えをいただきたい。

向山洋一

「なぜ、勉強をしなければならないのか」
教え子に問われた。

——なぜ、勉強するのか——、私はことあるごとに教室で話していることを語った。

「人間は、何のために生きているのだろうか。人間の生きがいというのは何なのだろう。先生は、三つあると思っている。」

第一番目は、自分の夢を達成することだ。夢は人によって大きくちがう。外国旅行をする夢もあれば、東大に合格する夢もある。家を建てる夢もあれば、結婚したい夢もある。

一人一人の夢を実現すること、それが人間の生きがいなのだ。

第二番目は、自分の可能性を伸ばすことである。

これまでできなかった二重まわしができるようになること、剣道が三段に上達したこと、人の前で上手に話せるようになったこと、楽しい授業ができるようになったこと……。

このように、今までの自分に欠けていたことが努力の結果伸びていくこと、これも人間の生きがいなのだ。

八十歳になるおばあちゃんだって、踊り、カラオケを楽しむようにやっているのもこのことだ。

そして三番目は、人の役に立つことをす

ること——これも人間の生きがいだ。

人間は一人で生きていけない。

お互いに支えあっている。

それは、それぞれの人が、別の人の役に立っているということだ。

勉強するというのは、このような人間としての生きがいを大きく広くしていくことだ。

あなたが関心のある「ボランティア」のことだって、本当に人に役立つことができないためには、もっと勉強しなければいけない。

学校でいい成績をとることではない。今、学校で習っていることぐらい、きちんと身につけることが必要なのだ。

その子は納得したのだ（と思えた）。

むろん、これだけで勉強するようになるとは思えない。

しかし、このような場を一つ一つくぐりぬけて成長していくのだろうか。

——なぜ、勉強するのか——、私たち教師は子ども達の問いに答えていかなければならない。

そう考えると、「人に役立つことが人間の生きがいである」という視点が、今の教育から欠如していることが分るのである。

むろん、それには理由がある。

十五年戦争である。

戦争の時「国のため」ということが強調され、「滅私奉公」のもとに、人々は戦争に協力した。

戦争が終って、国民全体が反省をした。そして「国のため」より「自分のため」が強調されたのである。

これは、当然のことでもあった。

しかし、それがすぎて「滅公奉私」の状態が生まれてしまった。

「人に役立つ学習」は、全くといっていいほど姿を消してしまった。

しかし、これは行き過ぎであった。

「戦争に負けた」反省は大切である。しかし、そのような状態は、極めて特殊な条件である。

極めて特殊な条件での「あるべき姿」が一般化され、五十年も続いてしまった。

そろそろ、軌道を修正していいだろう。いや、修正するべきである。

戦争前の教育が、すべて一〇〇%悪かったということは、あり得ない。

ある部分は、大切なことだったのである。戦前の教育があったからこそ、戦後の復興もあり得たのである。

「人に役立つ教育」という、ジュニア・ボランティア教育の提案は、このように「人間の生きがい」「勉強する意味」「戦後教育のあり方」への、一石を投じるものである。

二

では、今、提言している「ジュニア・ボランティア教育」とは、いかなるものか。本誌で何回か述べてきたが、極めて重要なことなので、要点を再度紹介したい。

夏休み、私は家族と共にオーストラリアのパースにいた。

インド洋に近い、美しい都市である。

パースの町から特急で二時間、南極大陸方面に下り、そこから車で二時間入った小さな村にケリーはいた。

ケリー、中学二年生の金髪の美少女である。私の娘のペンフレンドであり、私は娘について、ケリーの家までやってきたのだ。

周りは牧場と林と草原。ケリーの通う中学校は、すてきな建物だった。

ケリーは、スポーツが得意であり、とりわけ水泳が好きとのことだった。

ケリーは、水泳で人命救助の資格をとったことを、誇らしげに話してくれた。

ライフ・セービングの資格は、この国の少年・少女の誇りであった。

ケリーは、「人のためになる」学習をし、その資格がとれたことを誇らしげに語ってくれたのである。

この瞬間、私の頭はスパークした。

この子は、人のための学習をしたのだ。それを誇りに思っているのだ。

日本の教育の中に、このような視点があったらうか。

人間は、自分自身のための学習をするのは当然だ。

しかし、その中のいくらかは、人様のための学習もすべきだ。

しかし、これは簡単にはいかない。心がまえだけ、いくらいても駄目だ。

「人様のための学習」をするシステムを日本中につくらなければならない。

日本の子どもが、「人のための学習」をするシステムをつくる。

では、何をしたらいいのか。

とりあえず、このような学習の必要性を訴えていくことである。このことに反対する人は、ほとんどいないだろう。

しかし、例えば、日本中の一千万人近い小学生に、どのような内容の人様のための学習を設定するのか——これは大問題である。

しかし、ここが、はつきりしないとこの運動はすすまない。

そこで、私は、次のことを向山私案として提案する。

- 一、一年間に三時間（一ユニット）の人のための学習時間を設定する。
- 二、三時間をユニットとして一つの

特集 緊急提案 人の役に立つ学習 ジュニア・ボランティア教育の提案

ことがらを学習内容（例 目が見えない人への援助）を行う。
三、学習ユニットは数十種・数百種と用意する。（例 特養ホームでのイベント、手話、環境調査）

大切なのは、ユニット三時間程度として、一年間でユニットを学習することを目標にしたことである。

ボランティアに熱心な人から見れば少ないであろう。しかし、一千万人の子どもが、もし、この学習をするのなら、「日本の教育が変わる」というほどの大事件になると思う。

さて、どこで学習するのか。

四、学校・塾・社会団体など、定期的
に子どもを集め一定期間教育活動・
社会活動をしている団体は、本学習
を設定することができる。
五、学習終了者には、認定証・バッジ・
テキスト（三点セット）が授与される。
六、以上の資金は、広く社会からの寄
附によってまかなわれる。

学校以外、さまざまなところで教育可能
にすべきである。又、教育終了した子ども
には、何らかの形あるものが、示される必
要がある。

（教育の法則の研究その20より）

—
では「ジュニア・ボランティア教育」の
新しい主張とは何なのか。

このことを明確にしておくことは、極めて
大切である。

「新しい主張」——その内容こそ、今後
この運動をすすめていく上での原動力だか
らである。

二

「ジュニア・ボランティア教育」におけ
る「新しい主張」とは、次のことである。

（一）日本の子どもたちに「人に役立つ
学習」をしようとよびかけた。

このような主張はこれまでなかった。

「ハンディキャップ」を持った人を、援
助しようという主張はあった。この場合、
視点は「ハンディキャップ」の人にある。
子どもは「援助する人」になる。

私の主張は、視点を「子ども自身」に置
いている。

学習には「自分に役立つ学習」と「人に
役立つ学習」の二つがあるのだと主張して
いるわけである。

然るに、日本の子どもは、一年間に学ぶ
千数百時間（学校教育・家庭教育を含め）
のすべては、「自分に役立つ学習」のみであ
った。明治五年の学制発布以来、「戦争への
協力」を除けば、ほとんどこうであった。

子どもにとって「自分に役立つ学習」の
みならず、「人に役立つ学習」をすること
は、その意味で、革命的な変化である。
「なぜ学ぶのか」という、根源的な問い
に真正面から答えた「学習の意味論」であ
るからだ。

「ジュニア・ボランティア教育」が普及
すれば、それは「二十一世紀」をむかえる
にあたつての、望ましい変化を「教育」に
もたらすはずである。

このような「学習」「教育」の意味につい
ての根源的な問いを含んでいるのである。

（二）ユニットを三時間と構想した。

「人に役立つ学習」は、大切だ。大切に
から、せいじっぱいにやる、できる限りや
るということでは、無理がくる。

第一歩は「ほんの少し」でいいのである。
「ほんの少し」なら、無理はない。

日本中の子どもに普及させようと思つた
ら、このような配慮は大切だ。

「もっと勉強したい人」は、それは、自
由にやればいい。そういう人だつて出てく
るだろう。けっこうなことだ。

が、運動としては「一年間ユニット三
時間」としていききたい。

これなら、日本中の保護者は「我が子に
も、ぜひ、そのような教育を受けさせたい」
と思うだろう。

運動としては、それが大切なのである。
「無理なく、一つのステップをふみ出す」
ことが大切なのだ。

この運動が広がっていけば、毎年、一ユニットを学習することになり、何年かたてば「蓄積」も出てくるのである。

(三) 学習の終了システムを導入した。

「人に役立つ学習」には、際限がない。
だから「もつと、もつと」学習しなければ
ならない思いがちである。

が、これでは、子どもにとって「学習の
達成感」がない。

学校だって、毎学期通知表を出す。修了
証も出す。ピアノだって、スイミングだっ
て認定証を出す。

学習には「節目」を区切る「終了システ
ム」が必要だ。

これがあるから「学習の達成感」を味わ
い、「次のステップ」に挑戦しようとする。

私は、「一ユニット」を学習した子どもに
は「テキスト・認定証・バッジ」の三点セ
ットが与えられることが大切だと思う。

テキストがあるからこそ、全国的に安定
した「教育内容」が保証される。学習時
も復習に使われるだろう。

認定証で「一ユニット終了」を認定し、
達成感を味わわせたい。

(四) 日本中の子ども全体を対象にして
いる。

この運動は、日本中の子ども全体を対象
としている。

一部の子どもがやればいいということでは
ない。

ぜひとも「すべての子ども」に「人に役
立つ学習」を体験してほしいのである。

従って、この運動の企画は、そうした目
的に応じたものとしていかなばならない。

(教育の法則の研究その21より)

三

「ジュニア・ボランティア教育」は、教
育(学習)こそが中心である。

「ジュニア・ボランティア(実践)」が中
心ではない。

あくまで、教育(学習)が中心である。
それは、この教育のねらいが「すべての
子ども」を対象にしているからだ。

ボランティアの実践は、もとより大切に
ある。現にさまざまな形でされている。
こうしたことがもつと広がってほ
しいと願っている。

しかし「ボランティア(実践)」を、一千
万人の子ども、すべてにさせるわけにはい
かないだろう。

一千万人の子どもをボランティアに参加
させる「しくみ」は、それはそれは大変な

ものになる。
子ども十人に一人ぐらいの大人も必要に
なるだろう。

今の社会ではとてもできない。

しかし、教育(学習)ならできる。そし
て、教育(学習)をうけた子の中から、更
にすすんで、ボランティア(実践)にす
む子どもも生まれてこよう。

今の日本では、すべての子どもに「人に
役立つ学習」をうけさせる「しくみ」をつ
くっていくことが大切なのだと思う。

『教育トークライン』誌に書いたことだ
が、私は「ボランティア」を四つの層で考
えている。

退職者の ボランティア活動
社会人の ボランティア参加
高・大(中)学生の ボランティア実習
小(幼・中)学生へ のジュニア・ボラ ンティア教育

私は、いずれ日本の学生に、授業として
「ボランティア」実習が課せられると思っ
ている。諸外国にはすでにされているし、
日本でも部分的に実施されている。

企業等のボランティア参加は、今後もま
すます加速するだろう。

退職した人による、これまでの経験を生
かしたボランティア活動も、もつと普及す
るだろう。例えばアメリカのスミソニアン
博物館は、多くのボランティアによって運

特集 緊急提案 人の役に立つ学習 ジュニア・ボランティア教育の提案

営されている。

そうした社会になっていく出発点が、「すべての子ども達へのボランティア教育」である。

これは、本来「ボランティア学習」とする方が望ましい。しかし、出発に当ってはやはり、経験のある大人が力をあわせ、「ボランティア教育」の中味を作っていくことになる。

「ボランティア教育」にするか「ボランティア学習」にするか、議論もあったし、真剣に考えもしたが、しばらくの間は「ボランティア教育」ということで、すすめることとしたい。

四

さて、それでは「ジュニア・ボランティア教育」に賛成する人は、何をしたらいいのだろうか。

A 第一段階として、次のことをお願いしたい。

●ジュニア・ボランティア教育の理解と普及。

そのために『ツウウェイ』本誌と『教育トークライン』臨刊(『ジュニア・ボランティア教育』を友人・知人に紹介していただきたい。

『ジュニア・ボランティア教育』は、東京教育技術研究所から二月十一日に

出版される。

B 第二段階として、次のことをお願いしたい。

●自分のクラス・学年、児童館などの担当児童などに「ジュニア・ボランティア教育」を実施する。

その際、どの時間をあてるのか、根拠をはっきりさせる。道徳・体育・家庭科・学級指導などの時間が活用できるはずである。

学年の先生方の了解をうる。

校長先生に理解していただき、できた

修了証を作っていた。

修了証は、いずれ全国共通のものも作

っていききたい。しかし、過渡期として

それぞれの場の責任者の方のご協力も

いただいていきたい。

修了者の氏名は、すべて『ジュニア・

ボランティア教育』誌で紹介していき

たいので、東京教育技術研究所までお

知らせいただけたらと思う。

もつと、やっていきたいと思う方は

ひ、他校の先生、福祉協議会などをたず

ねて「地域のネットワーク」を作ってい

つていただきたい。

訪ねていただきたい所。

教育委員会、

教員組合

P T A 連合

新聞社

社会福祉協議会 テレビ局

子ども会連合

これまでのささやかな活動を通して、いえることは、どこでも熱心に話を聞いてくれ、協力を申し出て下さることである。

訪ねていく時は『ツウウェイ』、『トークライン』などの「資料」が、ぜひとも必要である。

ぜひ各地で右のような動きを作り出し、できたら、チャレランのように「県連」を作っていたらと思う。

その際「県連」は、できる限り多くの方々に参加をいただけるような、大きなしくみがいいと思う。

この活動をすすめる上で、ぜひとも「テキスト」が必要となる。

現在までの所『ツウウェイ』本号と『トークライン』臨刊と「向山洋一原理原則研究会」作成のものしかない。

但し「原理原則研究会」の資料は、誌上論文試合TOS Sリーグ参加者のものであり、できればはかななりよい。二十種ほどがあり、東京教育技術研究所で、「資料」という形で緊急出版したものである。

いずれ、テキスト、指導書などを準備していく予定である。

「ジュニア・ボランティア教育」へのご意見をいただけたらと思う。

向山洋一の
ジュニア・ボランティア教育
Q & A

実際に実践して 子どもの反応をみる

回答 向山 洋一
(東京都大田区立雪谷小学校)
構成 師尾喜代子
(東京都大田区立雪谷小学校)

Q1

ジュニア・ボランティア教育の運動は、何から始めればよいか

向山先生が言われる通り、この運動は、大きく広げていかなければいけないと考えています。私のような者でも何かしなければと思うのですが、若輩で、力もない教師にもできることはどんなことでしょうか。

(教師歴2年・女)

向山の
A

まず、授業をし、そして本誌を広めてください

まず、教室の中で、三時間、ジュニア・ボランティア教育をして頂き、子どもたちの感想をとって頂くことです。

うちの学年では、3クラス(向山、板倉、師尾)が、6年生最後の授業参観で行いました。

自分のクラスだけでもできることですが、できれば学年の先生方に提案し、相談し、やってみようということになれば、是非みんなで行ってみてください。ちょっと勇気があるかもしれませんが、できるならば、そのよう
にお願いしたいと思います。

ジュニア・ボランティア・テキスト

手話を覚えよう

原案：河田孝文 作成：金井英治
イラスト：多胡由夏

問題 1

次の絵のような動作は、何かの動物を表しています。
()の中に動物の名前を書きましょう。



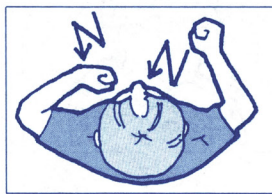
人差指と小指を立て他の三指の指先をつけ合わせ軽く前に二度ほど出す。
()



両手を左右のコメカミに当て、後方に手を曲げる。
()



湾曲させた右手を鼻の前に置き、前に出す。
()



両手でこぶしを握り、交互に腹をたたく。
()



右手のこぶしをほおに当て二度ほど回転させる。
()

問題 2

声をださないで、自分の言いたいことを相手に伝える方法のことを何といいます。

次の の中に書きましょう。

問題 3

この方法は、どんな人たちが使うのでしょうか。

次の の中に書きましょう。

1

解説と答え



① きつね



② うさぎ



③ うま



④ たぬき



⑤ ねこ

このように、声を出さなくても動物を表すことができます。実際にみなさんもやってみてください。

このほかにも、次のようなものがあります。



ふた

右手を湾曲させて指先を鼻の頭に当て、下からすくい上げるようにして前に出す。



しか

右手の人差指・中指・薬指を伸ばしてコメカミに当て、ひねりながら上に上げる。



うし

両手の人差指と親指を伸ばして左右のコメカミに当てる。人差指は軽く曲げる。



いぬ

両手を左右のコメカミに当て、二度ほど前に倒す。



さる

左手の甲を、右手の指先で二、三度かき上げる。

問題 4

次の手話はどのようなことを表しているのでしょうか。

の中に書きましょう。



①



②



③



④

2

解説と答え



手話というのは、耳の不自由な人たちや言葉が不自由な人たちのコミュニケーションの方法として使われます。

手の動きと身振りによる言葉のことです。

答え 手話

3

解説と答え

耳の不自由な人たちや言葉の不自由な人たちが手話を使います。この人たちは、何かの原因で耳が聞こえなくなったり、声が出せなくなったりしたのです。

そのため、手や体を使って、自分の言いたいことを伝えるのです。

これを手話と言います。

みなさんも、手話ができると耳の不自由な人や、言葉の不自由な人とも話しができるのです。



問題 5

次のお話は、耳が聞こえない人の役に立つために手話で一生懸命が**んば**っている人のお話です。このお話を読んで、あなたがこれからやろうと思ったことがあったら下のわくに書いてください。（読めない時は先生に読んでもらってください）

はじめての手話通訳 つうやく 田中 精一

東京都手話通訳派遣協会

私が手話の学習を始めたのはもう20年も前のことです。当時は手話講習会もなく、手話サークルに参加しての学習でした。

私も地域のろう者協会（現・聴覚障害者福祉協会）が中心になってつくった手話サークルに結成と同時に参加して学習を始めました。

6～7人の学習者を、20人ぐらいの地域の聞こえない人たちが取り囲み、ろう者協会の役員の人たちがガリ版刷りで作ってくれたテキストを使つての本当に楽しい学習でした。

手話の学習を始めて半年、私のはじめての手話通訳体験は、意外に早くやってきました。ろう者協会が毎年実施している1泊のバス旅行に誘われ参加しました。最初の見学場所は、ウナギの養殖所。

養殖所の係の人が「みなさん、説明しますから集まってください」とやってきた時、「エーっどうしよう！」と思いました。約40名のうち健聴者はバスの乗務員のほかは私1人。

台の上に立って、必死の思いで手を動かしながら、足がふるえ、汗が首筋や背中を流れていくのがわかります。わずか20分ぐらいの説明でしたが、くたくたに疲れてしまい、何とか伝えようと思えば思うほど、頭のなかが真っ白になっていきました。

説明が終わると同時に、みんなが「ご苦労様」の手話と拍手をしながら私のまわりに集まってきました。なかには「のどがかわいただろう」とジュースを買いに走ってくれる人も。私が台を下りながら「通訳できなくてゴメン」とあやまると、「これまでは何にもわからなかった。でも今日ははお前がいたから半分ぐらいはわかった。今度はそれをもう少し広げようがんばってほしい」という言葉が返ってきました。

聞こえない人たちのこんな優しさを支えられながら、私の学習はつづいていきました。

NHKみんなの手話上 日本放送出版協会

4

解説と答え

次のような言葉を表しています。



この他にも、次のようなものもあります。
 友達と、手話を使ってお話をしてみましょう。



5

解説と答え

手話は、耳の不自由な人たちとともに喜び、悲しみ、生きるために学ぶのです。

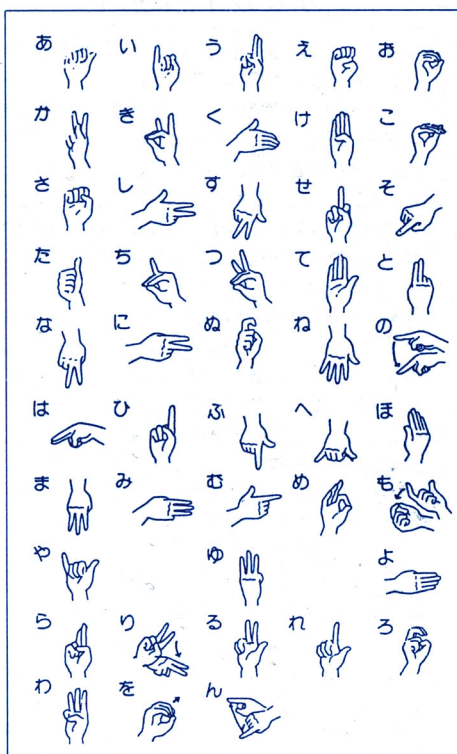
すべての人たちが、手話を使って自由に話し合うことができれば、どんなにすばらしいことでしょう。

みなさんが、心をこめて手話を学ぶことを期待しています。

参考・・・指文字

指文字を覚えよう

手話では、表現が決まっていない言葉や物の名前などを正確に伝えるために使われます。



編集長日記

八月一日(日) 法則化セミナー一日目。各講座ごとに準備したテキストが大好評。余分に作成したのも、ほぼ売り切れ状態。研修には、このようなテキストが必要であるという新しい問題提起になった。

夜、パーティー。百数十名で大盛會。啓林館出版の山田常務をはじめ、さまざまな方が参加。野口・酒井先生を混えて二次會。

八月二日(月) セミナー二日目。水野茂一先生の講演が大好評。野口・有田・酒井・根本・吉川氏などの講座も根強い人気である。

アンケートに「向山洋一一日講座」を希望する意見が目立った。

反省會を仙台の竹川氏の叔父さんの店でやって、中途で羽田へ。最終便で福岡着、中州で一献。

八月三日(火) 福岡・山の上ホテルで幼稚園の先生方に講演。

帰途の機中で、すばらしい企画を計画中のA氏と懇談。再會を約束。

八月四日(水) 朝の新幹線「のぞみ」で名古屋へ。JRにのりかえ岐阜へ。看護学校の先生方の夏期特別研修で講演。夕方帰京。

八月五日(木) KGMヒルズの事務所で「幼児教室」についての企画會議。

久しぶりに近くのふぐ屋で十名程で一献。

八月六日(金) 本を「買い出し」に行き(二十冊購入、終日読む。

八月七日(土) 羽田から福岡空港へ。(しかし、何としばしば福岡空港を訪れることか…) 高速道路二時間で大分県のモラロジー研究所へ。

百名ほどの先生方に、講演、質問、囲み會などの役をこなす。半分近い方が、私より先輩であり、教育長の肩書きを持つ方も何人かおられた。

八月八日(日) JRで博多へ。樋口氏を呼び出す予定が、TELナンバーを忘れ、時間に追われ、東京へ。

八月九日(月) 成田空港から、オーストラリアパースへ。パースはインド洋に面した美しい都市である。世界中を旅した兼高かおるが、「住むならパース」と言ったこと有名になった。

パース空港で、森先生の友人に会い、ファイアツホテルへ。

八月十日(火) インド洋を見る。公園等を見学。

八月十一日(水) タクシーでバンパリーへ、とばすこと二時間。そこから更に二時間かかって娘のペンフレンド、ケリーの家へ。

人口七百人の小さな、美しい街である。いろいろな人に紹介された。通訳は家人。どうやら通じる。

八月十二日(木) 小学校・中学校・幼稚園を見学。絵本の中のような学校だった。娘もケリーも別かれる時、泣いていた。

八月十三日(金) コアラ・カンガルーなどを抱ける公園を見学。町をショッピング。自由に街を歩きたいのが楽しい。

八月十四日(土) パース空港から帰国。カンサス航空のビジネスシートをほりこんだ。

成田からタクシーで千葉一の宮の仕事場へ。母、第一家と合流。パーベキュー。

八月十五日(日) 一の宮海岸に海水浴。

八月十六日(月) 帰京。読書。

八月十七日(火) 事務所に仕事。

八月二十日(金) 会計事務所との打ち合わせ。

八月二十一日(土) 都市センターホテルにて初心者合宿。講演。羽田から福岡空港へ。新幹線で山口へ。出迎える横田氏と川棚温泉へ。三十名余の宴會。久しぶりのプレス。実に楽しい会だった。

八月二十二日(日) 二百名ほどの先生方に講演。

八月二十三日(月) NHK、ふれあいラジオパーティーに出演。一時間半の生放送。

八月二十四日(火) NHKラジオ二日目。評判がいそうである。

八月二十五日(水) 日直。学年の先生方と打ち合わせ。

八月二十六日(木) 新幹線で大阪へ。三井ガーデンホテルで企業の方々に講演。終了後、税所・進氏と宗右衛門町のふぐ料理店へ。

八月二十七日(金) 打ち合わせ。台風で新幹線ストップ。京都泊。

八月三十日(月) 法則化論文の審査。

八月三十一日(火) 高尾山の「うかい島山」にて中央事務局の昼食會。京浜サークル創業の井内氏、かつての女性(スターライター)石岡・小口・鈴木氏も参加。二十五名の大宴會で、なつかしく、楽しいひとときだった。一身上の都合で研究所を退職された新牧和子所長も参加。

ジュニア・ボランティア・セミナーの強力な推進を全員で確認。

教室ツーウェイNo.108

発行所 明治図書出版株式会社

東京都豊島区南大塚二二九九一五

振替 東京・六一五一三二一八

編集 〇三(三九四六) 三二五一

営業開発センター 四六(二五) 二五

一九九三年十一月一日発行©一九九三

信念が道を拓く

—ジュニア・ボランティア教育と授業革命

河田 孝文

一 針の先ほどの風穴

「日本の子どもたちに『人に役立つ学習』をしよう」

この一言から、すべてが始まりました。学力でも道徳でもない、「人のために学ぶ時間」を、子どもたちに与える——それは当時の教育界では前例のない、斬新すぎる提案でした。1994年2月11日、向山洋一氏の呼びかけにより、「ジュニア・ボランティア教育（JVE）」は静かに、しかし確かな決意をもってスタートしました。

当時の学習指導要領には「ボランティア」の文字すら存在していませんでした。日本の小中学校では、年間一〇〇〇時間もの学習が行われていますが、そのすべてが「自分のための学び」でした。誰も疑問を抱かなかった時代に、向山氏はあえて問いを投げかけました。「本当にそれでいいのか。人

に役立つ学習も必要なのではないか」と。

JVEは、何もならないところに針の先ほどの風穴を開ける運動でした。あの日、何の後ろ盾もないまま、その風穴を開けようとした運動は、まさに無謀にも思えるほどに強烈で、勇敢な挑戦でした。それでも、向山氏を信じ、共に歩む決意をした多くの教師が、少しずつその風穴を広げていきました。結果的に、それは新たな教育の流れを生み出すきっかけとなったのです。

二 言葉にできなかった思い

最初は、この「ジュニア・ボランティア教育」に対して、誰もが手探りの状態でした。教育課程の中にボランティア教育を組み込むために必要な教材もテキストも、どこにもありませんでした。その時、向山氏が呼びかけ、全国の教師たちが集まって、ボランティア教育の教材作りが始まりました。

教材作りに関して、最初は本当に手探りでした。福祉教育やボランティア教育の専門家がいないわけでもなく、誰もが試行錯誤しながら進めていきました。それでも、少

ずつ全国の教師たちの間で、教材が作られていきました。その結果として、いくつかのテキストが完成し、その中には私自身が手掛けた「手話テキスト」もありました。

三 初めての提案

この運動の中で、私は勤務校で次のような提案をしました。それはまだボランティア教育や福祉教育が学校に根付いていない時期で、周囲の理解も得られていない状況でした。

それは、「全学級で年間三時間ほどボランティアの授業を実施し、その成果を報告する」というものでした。ジュニア・ボランティア教育の概念そのままです。

正直に言うと、周囲がどう反応するか心配でしたが、意外にもあっさりと了解を得ることができました。そして、校長の了解をもとに、JVE教材を校費で購入することになりました。この時、私は強引ではなく、あくまで控えめに教材を集め、授業の準備をしていきました。そんな中で、保護者からは感謝の言葉や賛同の声が寄せられ、少しずつ福祉教育への理解が深まっていきました。

四 教育の現場で実感したJVEの力

特に印象に残ったのは、実施した授業参観の日です。この日は「心の教育研修会」と題され、全校一斉に福祉ボランティアの授業を保護者に公開するというものでした。アイマスクを使った授業、点字の授業、車いすの介助体験、手話の授業、障害者理解を深める授業などが行われました。

その時、私は初めてJVEが持つ力を実感しました。私が控えめに職員室に並べておいたJVE関連の教材が、ほとんどの先生方の机上で開かれ、コピーされている光景を目の当たりにしたのです。教材が実際に使われている様子を見て、JVEが確実に学校現場に根付いてきていることを実感しました。そして、その後、保護者からも賛辞や応援のメッセージが続々と届き、さらに多くの先生方が福祉教育を積極的に取り入れていくようになりました。

五 セミナーでの転機

JVE教育が始まった後、TOS S最大

のセミナー「法則化サマーセミナー98」で、模擬授業の提案者募集がありました。私は思い切って立候補しました。その授業が向山洋一氏による指導案審査を通過し、実際にステージで点字の授業を提案することになりました。

授業の構成は、点字が読めて書いて、点字ペンを使えるようになるというものでした。授業道場では、向山氏から直接フィードバックを受けられることに大きな緊張と期待を抱えていました。

・テンポよく ・説明しない ・楽しく
この三つを意識して点字の読み書きを實現するという時間を納めるために必死でした。

授業後、向山氏から高評価をいただきました。

この授業が、私にとつての大きな転機となり、その後、数多くの全国セミナーで模擬授業や講座をさせてもらうようになりました。

六 風穴を広げて

ジュニア・ボランティア教育がなければ、

私があの時点字の授業を提案することにはなかったでしょう。あのセミナーで得た経験が、私の教育者としての成長を大きく促しました。ジュニア・ボランティア教育は、単なる教育運動を超えて、私にとつて人生を変える力を持つ運動だったといえます。この運動が私を新たな方向に導き、教育の意義を再発見させてくれました。

向山洋一氏の言葉とともに始まったこの運動は、当初の小さな風穴から始まり、今では多くの学校に根付き、当たり前のように福祉教育が行われています。あの風穴は、単に一つの教育プログラムにとどまらず、社会全体に広がり、次世代の子どもたちに「人に役立つ学び」を提供し続けているのです。

私たちが開けた小さな風穴が、やがて大きな教育改革へとつながり、学びの本質を深め、社会貢献の大切さを教えてくれる場を育んできました。この運動の力強さ、そしてその影響が続いていることを、これからの教育に携わる者たちにもぜひ感じてほしいと思います。それが、次の世代に繋がる未来を創り出すのだと信じています。



5 月特典

No.18 | 2025年 5月

向山洋一 教育資料

1994 ジュニア・ボランティア教育誕生

$\frac{3}{1000}$ 人に役立つ教育を

特典音声

<https://vimeo.com/1074832339/fb8d342f16>



発行日 2025年 5月 2日

発行所 向山洋一教育技術研究所

所在地 〒142-0064 東京都品川区旗の台 2 丁目 4 番12号



谷和樹の教育新宝島

<https://shintakarajima.jp>



向山洋一公式ウェブサイト

<https://mukoyamayoichi.com>

このPDFは、プリンタの「冊子印刷」を選択すると冊子になります。
他人への譲渡および個人研究以外の目的で使用することを禁じます。